

『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題 五

小谷成子・野崎典子

今回の翻刻は、『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題四』（愛知県立大学文学部論集 国文学科 編第五二号平成一六年二月発行）につづくものである。

凡例

- 一、これは愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』の翻刻である。
- 二、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処理を施した。
 - 1、原文に句読点はないが、詞章の終わり等に一字分程度の空白をおいた。
 - 2、丁付けは省いた。
 - 3、曲中に付した／＼・シテ・アト・——等については、朱書・墨書の区別はしなかったが、朱書きの傍書に限って（ ）で括って示した。
 - 4、誤記と判断し得る場合も、修正しないで（ママ）と傍記した。

5、漢字の字体は通行の漢字に改めた。ただし、異体字、略体字は本字にした。合字は開いた。

𠂔↓喜 厂・鴈↓雁 メ↓シメ ち↓より

6、宛字も多くみられるが、そのままとした。

竹類(畜類) 御行所(御教書) 字文(呪文)

翻刻

和泉流秘書 七冊之内三

目録

惠毘須大黒 惠毘須毘沙門 毘沙門連歌 大黒連歌

筒竹筒 昆布柿 雁雁金 三人夫

引敷聾 懷中聾 八尾 折紙聾

髭槽 川上 鱸疱丁 とちはくれ

歌仙 鬬罪人 小傘

シメ (ママ) 十八番

惠毘須大黒

次第^{アト} 帰へるぞ嬉し古里にく行て子供に逢ふよ 名乗^{アト} 是ハ河内の国交野郡の者て御座る 某宿願の子細
有て西ノ宮宮夷三郎殿江参詣致て御されハ都ひゑい山黒谷の大黒天江参れとの御告て有た 夫故ひゑい山黒谷の大黒
天へ参り唯今下向致ス 先急て国元へ帰ふと存る ^{道行} 誠ニ今迄こそ身まつしけれ 両神の御かけて行くハ富貴に
成るて御座らふと存る事ちや イヤ何角と言ふ内に戻た 我家ニ勸請申そふと存る ^{大臣柱より目付} 一段とよい 先
是へ寄て居よふと存る ^{出ル} 惠毘須大黒 シテ 大黒とく ^両 惠毘須ハ心合せつ、数の宝を取持て衆生にいさやあた
ゑん ^夫 夫へ御出被成たハ殿方て御さる ^惠 是社汝か信する惠毘須三郎ニてあるそとよ ^{ハア} ハアー ^又 又夫
へ御出被成たハ殿方て御さる ^是 是こそひゑい山三面六眉の大黒天ニてあるそとよ ^{ハア} ハア是迄の御来りん難有
ふ存升 先斯ふ御通り被成ませ ^{両神} 心得たく此様に両神心を言合せて来たか嬉しいか ^是 是ハありかとふ存升
此上ハ御両神の目出度いわれ承りとふ存升 ^惠 語て聞かせう よふ聞け ^{ハア} ハア ^抑 抑伊弉冉の尊天の浮橋
にてみともまくいはいありしより日の神月の神蛭子そさのふを生^{ハア} 升 ひる子とハ某の御事天照す大神より第三男なれ
ハ西宮惠毘須三郎とあかめられ万のうろくす釣上ケし事を始其上商売の守護神と申も此惠毘須三郎なり なんほふ目
出度神にてハなきか ^扱 扱く難有ふ存升 此上ハ大黒天の御謂か承りとふ存升 ^語 語て聞かせう よふきけ
^{ハア} ハア ^扱 扱も伝教大師垣武天皇と御心をひとつにして唐土の天たい山を我か朝に写しひゑい山を開 其時一
山を守へき御神を顕れ給へと祈らる、ニ此大黒天出現す 伝教大師申ハ大黒天は千人の衆生を守り給ふ 御山ハ三千
人の衆徒なるニより大黒天ニてハ叶ふましいと申されけれハ其時大黒天おふいにいかりをなし ^{三面六眉の形を}
現す それよりして一山を守りひんなる者にハ福をあたへ愚成る者にハ知恵を授ケなんほふあらた成る御事なり
^惠 ヤイく ^{ハア} ハア ^惠 汝ハ富貴に成り度いか ^何 何卒富貴になりとふ存升 ^{左右} 左右あらハ常々信向す

る故両神共に福をあたよふそ

夫ハありかとふ存升

出てくたからをあたゑんとてねすなきをしつゝさほ

をたれ目出鯛を釣上ケたる釣針を魚なからこそハとらせけれ

其時大黒すゝみ出てく打跡よりも打出の小槌を

おつとりのへて大地をてうくと打跡よりも七珍万宝わき出たる宝をわ殿にとらせけり

何れもおとらぬ恵毘須

大黒帰らんとせしか又立帰り猶も処の福天とならんくと此所にこそ納りけれ

イヤ

エイ

イヤ

エイ イヤ

大黒 頭巾 唐織 小袖 半被

半切 袋 槌 末広

コシニサス 面

恵毘須 上二掛ケ 烏帽子 唐織

小袖 ハカマ下ハカマニテモ面

ヨリ水衣 クミリハカマ 末広

腰にサス

願主 懸素袍 クミリハカマ

入用 シメ縄 かつら桶

恵毘須沙門

是ハ此辺りニ住居する有徳な者て御座る 某美人のひとり娘を持た 何者ニハよるまい氏種姓のけだかい者を

聾にとろふと存て西宮惠毘須三郎殿と鞍馬の多門天江祈誓申たれハ先高札と打てと示現を被下た 先高札と打とふと
存る シテ柱ニ打一セイニテ
舞台ニテ名乗 抑是ハ鞍馬の毘沙門とハ我が事なり 爰に有徳な者か美人の独り娘を持た 氏種姓

のけ高い者を聾に致シ度と言ふて某か前へあゆみをはこふニ依て先高札を上ケよと示現をおろいた 氏種姓誰におと
ろふそ某か参つて聾に成らふと存る 誠に某かいたらハ弥繁昌させてとらせうと依て舅か悦ふて有ふイヤはちや 物

申案内申 ア イヤ表に案内か有る 案内とハ殿方て御さる ヒサ 鞍馬辺より聾の望あつて来た ア 鞍馬辺と被仰
る、ハ多門天てハ御座らぬか ヒサ 多門天ニて有るそとよ ア 下ニ
居ル ハア ありかたふ存升 先斯ふ御来りん被成ま

ワキサエ通ルコシカケル舅カツラ桶直ススクニ
惠毘須一セイニテハシカミリニテウタイ出ル エビ 抑是ハ西の宮の惠毘須三郎ニておりやります 爰に有徳な者か

美人の独り娘を持た 何者にはよるまい氏種姓のけ高き者を聾にほしいといふて度、あゆみヲはこふニ依て高札をあ
けよと示現のなした 氏種姓の誰におとろふそ 身共か参り聾に成らふと存る 舞台江入
小廻り 誠ニ某かいたらハ其身ハ言

ふに及すとなり迄も繁昌させてとらせうニ依て嘸舅か悦ふて有ふ イヤ何角と言ふ内には是ちや此高札を惠毘須三郎か
引てす 左リノ手ニテ高札ヲ
引懷中スルシテアンナイコウ 物申案内申 ア イヤ表に案内かある 案内ハ誰ぞ 殿方て御座る エビ 西の宮辺よ

り聾の望有て来た ア 西の宮辺と被仰る、ハ若シひるこ三郎殿てハ御座らぬか エビ おそいすいかな惠毘須三郎ニ
てあるそとよ ア ハア忝ふ存升 乍去最前鞍馬の多門天の御出被成て御座る エビ 何ちや毘沙か来たか ア 左様

て御座る エビ 仏鉢を得た者ちや程に聾の望てくる様はないか ヒサ 舅 ア ハア ヒサ 表に聾の穿鑿か有る
何者ちや 此内ニ舞台へ
入ルコシカケル ア ハア西の宮の惠毘須三郎殿の御出て御さる ヒサ 夫へ来たハ西ノ宮の三ふか エビ そふ言

ふハ鞍馬の毘沙か ア それハ何事て御座る ヒサ 某か聾入か西の宮迄かくれかのふて生肴を商売に来たと見へた
エビ 舅 ア 毘沙か来たを推した ア 何とて御さる エビ 某か聾入か鞍馬の奥迄隠れかのふて生肴てむしかおころ

ふと思ふて山枡の皮を商売ニ来たと見へた ア 御互の御問答は御無用て御さる氏種姓のけ高き御方を聾に致とふ存
升 ヒサ 是ハよい処へ来か付た 惣して人の身の上ハ我が言、我が身の上を人に語らせて聞たかよい 某か身上を語

て後三ふか身の上を語らふ程によふ聞しませ ア 心得ました ヒサ 夫多門天といつは四王子の主迎しゆみの衆生を

守りひん成者ニハ福をあたへ富貴万福に榮さするも此多門天の守る処なり さあるニ依て年の始の初寅といわハ威光あらわす 又三ふか身の上を語て聞かせう 神といわ、れハ如何ニも奇麗なる森林にも住て市の中にすんて草鞋はき物たまゝ思ひ出さんとて小船に取り乗沖の方へ出ゝてほうすへの先にて御酒を吞絹のたちはつし布の立はすし着たる分て衆生済度ハ成まいそとよ エビ ヲミ夫こそ衆生済度の為なり いて某の身の上を語て聞かせう よふきけ ア

ハア エビ 抑并諸伊并冉の尊天の岩倉の苔庭にて男女のかたらいをなし日の神月神蛭子そさのをの尊をもふけ給ふ

ひることハ某の御事天照大神より三番目の弟なるニ依て西の宮夷三郎殿いわ、れ氏種姓誰にかおとり給ふをとろうへき あの毘沙

ハ仏とならハ人間近き所に住ハせいて鞍馬の奥に住て敵も持たぬつめ用心是先ツ以て無用なり 其上あの毘沙ニハ主

か有るそとよ ヒサ 主かあらふ事ハ エビ 増長広目多門時国と言ふ時ハ大仏ハ汝か主てハ無いか エビ 主てハない

下ニヲリ片ヒサツキイウナリエヒスモ下ニヲルノツテカルクイ ア 如何にやゝ聞給へ 誠の聲に成り度ハ宝を我にたひたまへ

ウナリ二神ノ中エ入下ニヲリワケて左右ノ手ヲヒロゲルナリ エビ 如何にやゝ聞給へ 誠の聲に成り度ハ宝を我にたひたまへ

ヒサ ヒサ い出ゝ宝をあたゑんとて 大小ノ前エ行舞ニナル拍子舞働 出ゝ宝をあたゑん 左より右エ 悪まかふくさ

いなんを払鋒を舅にとらせけり エビ ワ殿におれもをとるまし舞働 地 ワ殿におれもおとるまし迎作りめうか商ひ

めうか万のさいわいあらする釣針を魚なからこそハとらせけれ ヒサ 猶も舅ハほしかりて兜をぬいて舅に取らせ

エビ 烏帽子をぬいて舅にとらせ何れもおとらぬ福てんなれハ 地 此所ニこそ納りけれ イヤ エイ イヤ エイ

イヤ エイ 両方ムカイ ヤイ留ル

シテ 恵毘須 厚板 下袴 水衣 刀 タトリ 黄白花色コシ帯 釣針 鯛 扇 シヤウカケ面恵毘須

アト 毘沙門 厚板 半切 ソハツキ 扇 ホコ 面毘沙門

同 舅 のしめ 長上下 ワキ狂言ならハ 素袍エホシ

入用 かつら桶

毘沙門連歌

一ノアト 是ハ此辺りの者て御さる 今日ハ初寅なれハ毎年嘉例て誰殿を同道して鞍馬へ参詣 今日も参ふと存る 誠
 二月日の立は間のない事て御さる 去年参つたを近ひ事のよふに存たニはや一年立た事ちや イヤ何角言ふ内には是ち
 や 物申案内申 二ノアト イヤ表に案内がある あれハ誰殿の声ちやか エイ誰殿 定而御出被成りやうと存て居心
 待を致ておりました 夫ハよふこそ待せられたれ 何といつもの事く参り升まいか 如何ニも御供申ませう
 左右あらハいさ行かせられい 何か扱先行かせられい 身共から参ふか 一段とよふ御さらふ
 サア 御され 心得ました 誠ニ何と思わせらる、毎年か様ニ御同道申て参ると申ハ目出度事て
 御さるのふ 言わせらる、通り目出度事て御さる イヤ何角と言ふ内に鞍馬へ参つた 左様て御さる
 イサ拝み升まいか よふ御さらふ ハニ口テヲタタキ下ニ
居ルヲカムニノアト同斷 よふく 毎も連歌を致す時分て御さる イサあんじ
 させられい 心得ました 発句ハ出勝に致そふ よふ御さらふ 兩人共アン
シル こふも御さらるふか
 早や出ましたか 毘沙門のふくありのみと聞くからにと致た 一段とよふ出来ました 脇を致そう
 一段とよふ御さらふ こふも御さらうか はや出ましたか 鞍馬ぎれより百足喰けりと致た
 是ハ面白う御座る 先吟して見させられ よふ御さらう ト言テ兩人発句脇キ
共ニ吟シテ笑一段と出来トいふて シカく
 イヤケ様に申内に異香くんし只ならぬ氣色に成りました 左様て御さる 先是へ寄て御され 大小ノ前ニ
居ルシテ 是へ御出被成
 一セイニテ出ルハシカミリニテ シテ 毘沙門の光を放せと所から鞍馬きれより歩けり 二人共ハシカミリエ
ムキ下ニ居ル 是ハ難有ふ存升 先
 二ノアト 殿方て御さる 常ニ汝等か歩をはこふ多門天にてあるそとよ 左様て御さり升 何卒樂敷う
 こふ御来りんなりませ 二ノアト 捧桶持出ルシテ
フタイニ入コシカケル 扱汝等ハ樂しう成たいか 左様て御さり升 何て御さり升
 成りとふ存升 一の敷う成ニハ持いて叶わぬ物か有るか夫ハ持たか 夫ハ何て御さり升 何て御さり升

金銀ハ持たか 是ハ多門天の仰とも存ませぬ 金銀を持ませぬニ依て御願ひ申升ス あの者か申通て
 御さる 左右あらハ兩人共に福貴してとらせうそ 夫ハありかたふ存升 出てくありのみ割
 ん連らんはのほこをふり上ケてすつかり是を汝へやるそ 有難ふ存升 汝ニもとらするそ 忝ふ
 存升シテ色ニテ 扱只今の連歌ハ如何ニ 毘沙門の福有りのみと聞くからにニ 鞍馬きれより百足喰けり
 シテ立テ 毘沙門連歌の面白さに 拍子フミ舞働カケリ 左右シテホコヲ左ノ手ニテソエ 舞 毘沙門連歌のおもしろさに 左ノ手ヲ あくまか
 うふく打払ふ銚を汝にとらせけり 一ノアトヘ 地 あらくけなりやけなりやな 我にもふくをあたへたまへ 毘沙門ハ
 しかる所も尤也 地 連にんにくの鎧をぬいて汝にとらせ 是まてなりとて 扇開キサシ廻シカサシ順ニ廻リ 小廻リシテセウメンニテトメル 毘沙門ハ
 地 此所にこそ納りけれ イヤ エイ イヤ エイ イヤ引 クツロク

同替仕様

ワニロヲタミキラカム 扱今宵ハ是につやを致そふか但シ宿坊へ江寄ませうか イヤく通夜を致たかよふ御さらう 左
 迄替リナシ 右あらハちとまとろみませう よふ御座らふ 兩人常ノ通りねる ハアくく ねなから いふヲキル あらありかたやく多門
 天の御福を

大黒連哥

主 是ハ此辺りの者て御さる 毎年今日ハ子祭りを致し嘉例て若衆を申入て連歌を致ス 今日も参らる、筈て御さ
 る 何れもを待ふと存る 太郎官者あるか 太 ハア 主 居たか 太 御前に 主 汝呼出ス別の事てない 毎年

子日ニハ嘉例て若衆を申入て連歌を致ス 今日も参らるゝ筈ぢや 見へたらハ此方へ言へ 本 畏て御さる 主 エ
 イ 本 ハア 立頭 是ハ此辺りの者て御さる 毎年今日ハ誰殿へ参り連歌を致す 又爰に嘉例て同道する人か御さる
 さそふて参らふと存る 誠ニこういん矢の如しと申か月日の立ハ間もない事て御さる 去年参つたを此頃のよふに
 存したにはや一とせ立た事ぢや イヤ何角といふ内には是ぢや 物申案内申 立 二 イヤ表に案内か有る 案内ハ誰そ
 某て御さる 二 エイ誰殿よふこそ出させられた 頭 扱毎もの通り誰殿方へ参らふと存て誘引ニよりました
 やれ 二 夫ハよふこそさそわせられたれ 幸ひ何れも参らふといふて是へ参て、御さる 頭 夫ハ一段て御さ
 る 頭 イサ参り升まいか 二 一段とよふ御さらふ のふく 二 いづれも御さるか 各 是におり升くくく
 二 毎もの通り誰殿へ参るよふ二といふて誰殿か誘引われしました イサ参り升まいか 各 一段とよふ御さ
 らふ 各 よふ御さろう 二 二 さあ 御され 各 心得ました 二 いかにも御供申ませう
 頭 夫ならハ何れもいさ行かせられぬか 各 先行かせられい 二 何か扱先此方から行かせられい 頭 身共か
 ら参るか 二 一段と 各 よふ御座らふ 頭 さあ 来さしませ 各 心得ました 頭 誠ニ毎年か様に相替ら
 す連歌ヲ致すと申ハ目出度事て御さる 二 いわせらるゝ通りか様に何れも同道致スて参ると申ハ目出度事て御さる
 三 毎も嘉例て息才て参ると申ハ目出度事て御さる 四五 いわせらるゝ通りて御さる 頭 イヤ何角と言ふ内には
 て御さる 二 誠ニ是て御さる ハシカミリニテ 頭 物申案内申 本 イヤ表に案内か有る 案内ハ誰そ 頭 某てお
 りやる 本 エイ殿方もおそろいてよふ御出被成ました 頭 某共の来た通りをいへ 本 畏て御さる 先夫にお待
 被成ませ 頭 心得た 本 殿方升 主 何事ぢや 本 殿方か御出て御さる 主 何にいつれも御出被成たといふ
 か 本 左様て御さる 主 夫ハ一段ぢや こふ御通り被成いといへ 本 畏て御さる 斯ふ御通り被成いと申され
 ます 頭 心得た 主 いづれもお揃てよふこそ御出被成ました 頭 今日ハ目出とう御さる 各 主 先下
 二御され 各 心得ました 主 何と思わせらるゝ ケ様に相替らす何れも御出被下て連歌を致と申ハ目出度事て御
 さる 二 云わせらるゝ通り息才て参ると申ハ目出度事て御さる 三 目出度事て御座り升 主 扱毎ものことく連

歌を初メませう 各 よふ御さらふ 各 シカく 主 客発句に亭主ワきと申事か御さる 先殿方成り共発句を被
 成 頭 イヤく 発句ハ御亭主かよふ御さらふ 二 夫かよふ御さらふ 主 左様ならハ先あんして見ませう 頭
 あんして見させられい 主 こふも御さらふか 各 はや出ましたか 主 大黒の年貢納る今宵かな 各 頭 是ハ
 一段と出来ました 二 其通りて御さる 頭 身共か脇を致そう 主 能ふ御さるふ 頭 こふも御さらふか 主
 何とて御さる 頭 爰やかしこに俵多さよ 主 扱く面白ひ事て御さる 二 左様て御さる 二 某か第三の致そ
 う 各 よふ御さらふ 二 こふも御さらふか 主 何とて御さる 二 ねすみ共人の物をハ福すらん 主 ハミア
 面白ひ事て御さる 頭 先吟して見ませう 二 よふ御さるふ 各 く吟スル 主 扱く面白ひ事て御さる 頭
 左様て御さる 二 さて当年ハ別してよふ出来ました 主 殊の外面白う出来ました 各 其通りて御さる 主 の
 ふくいつれもケ様に申内に異香くんし只ならぬ事て御さる 各 左様て御さる 主 先是へ寄て御され 各 心得
 ました シテ 抑是ハ衆生に宝をあたふ成る大黒天といへる福天なり 主 是へ御出被成たハ殿方て御さる 各 シカ
 く 常く汝等か信心する大黒天ニてあるそとよ 各 ハア 主 毎年子祭りをする程に福をあたよふと思ふ
 て是迄あらわれ出た 各 扱く夫ハ難有ふ存升 主 先こふ御来りん成りませ 各 扱早く福
 をとらせうに遅なわつた 何れも福をとらせうそ 主 夫ハ難有ふ存升 主 汝等もほしいか 各 左様て御さり升
 主 乍去富貴に成るニハ持たいて叶わぬ物か有る 夫ハ持たか 主 夫ハ何て御さり升 主 金銀ハ沢山ニ持たか
 主 是ハ大黒天の仰せ共覚へませぬ 御座らぬニ仍て願ひ申事て御さる 主 夫ならハ麦米もあるまいなあ
 頭 左様て御さり升ス 主 夫ならハ下地から樂しう成る事ちやニ依て殊外六ツケ敷 主 乍去是迄あらわれ出た事ち
 やニ依て一度に福貴にせうすれ共幸事もなきにしかすと言ふ事かある 一度にたのしうすれハ又おとるおると言ふ事
 がある たとへハうす紙をかさぬるよふ二次第く二たのしうなして取らせうそ 各 夫ハありかとふ存升 主 扱
 人間ハ心持か有る 先奉公人ハ朝ニハ霜を払ふて主人につかへタヘニハ星をいたゝいて我が家に帰り百姓ならハ作毛
 ニ心を入何れも其身くの道情をいるゝか大事ニ而ある程ニかまへて由断すな 各 畏て御さる 主 扱そちたちか

吟したハ何事ちや 主 御耳へいれ升よふな事てハ御さりませぬ 主 おもしろい事であつた 早ふいへ 主 何れも申合ましてうち寄連歌を致て御さる (主 是ハ氣ノ毒な事じや 其連歌ハいかに) 主 大黒の年貢納る今宵かな 頭 爰やかしこに俵多さよ 主 ねすみとも人の物をやふくすらん 主 大黒連歌の面白さに七珍万宝打出の小槌是をハワ殿にとらせけり 立衆 やらくけなりやくな 我にも福をたひたまへ 主 ほしかる所も尤なりくとて三千大手世界(ママ)の財を納たる大黒の袋を汝にとらせけり 主 あそこなあのこの物をも言わぬハく若シ大黒をうらみやすると色ミ宝の衣装をぬいてかれ等にとらせ是まてなりとて大黒ハく此処にこそ納りけれ イヤ エイ イヤ引

筒竹筒

大和ア 是ハ大和の国の者て御座る 今日ハ八幡の御神事て御座る 嘉例て八幡宮江御酒をさくる 今日も持て登ふと存る 誠ニ去年持て参たを近頃の事のよふニ存たか月日の立ハ間も無事て御座る イヤ此辺りへ来たれハ殊の外草臥た 是に休ふて似合敷者も通らハ言葉を懸け同道致て参ふと存る 河内ア 是ハ河内の国の者て御さる 毎年八幡の御神事には嘉例て御酒を捧くる 今日も御神事て御座る程に持て登ふと存る 誠ニ毎年ケ様に息才て参るといふハ何より目出度事て御座る 大和 あれへ一段の者か参つた 言葉を懸ふのふく 河内 此方の事て御さるか 大 如何ニも此方の事ちや そつしなからとれからとれへ行し升 河 某ハ河内の国の者て御さる 八幡へ参詣致すか其方ハとれからとれへ行かします 大 夫は幸ひの事て御さる 某ハ大和の国の者て御さるか某も八幡へ参詣致す イサ同道申さふ物を 河 某も独りて淋しう御座つた いかにも御供申ませう 大 左右あらはいさ御され 河 何か扱先ツ御座れ 大 某から参ふか 河 よふ御さろう 大 サアく来さしませ 河 心得ました 大 扱其方ハ只参る

のか但シ心持か有るか 河 某ハ商売に酒にこしを致し八幡宮へ信仰致てから仕合かよふ御さる二依て毎年酒を筒に入て参り御酒ヲ上る事て御さる 大 扱くそうある事か 某も酒を商売をするか毎度今日の御神事二壺の口を明けてさへに入て持て登り上る事ておりやる 河 扱夫はい、合せても有るまい事ちや 大 其通りちや サアく行せられい 河 心得た 大 扱其方へふしんか有る 河 何事ておりやる 大 世間に酒に入る、物をさへとこそいへ其方ハ筒とおしやるか何とした事て御さる 河 イヤく筒とこそいへさへくとおしやるかふしんない 大 イヤくさへておりやる イヤケ様にあらそふ内に異香薫し只ならぬ気色に成て御さる 先ツ下に御座れ 河 心得ましたシテ 抑是ハ八幡宮に仕へ申鳩の神とハ我事なり 河 是へ御出被成たハ殿方て御さる 大 是ハ八幡宮の末社鳩の神是迄あらわれ出た 大 是ハ有りかとふ存ます 河 先ツこふ御来りん被成ませ 大 扱汝等兩人の者ハお山を別て信仰する事神妙に思召 乍去筒竹筒の論に日を暮らす事曲事に思召 乍去急き論を慎メお山へつれて参れとの御事二よりは迄罷出た なんほふありかたい事てハないか 河 是ハ有かたふ存升 大 扱身共もいかう草臥た 其御酒を某に捧ぬかいやい 大 誠に是ハ失念致しました 是ハ竹筒に入た酒て御さり升 河 是ハ筒に入た酒て御さり升 大 扱兩人の行末はんしやう二守り給へ 日本の大神小神中二も八幡大ほさつく此の御酒ハ某かたふるてす 河 ありかとふ存升 大 扱兩人もよふ聞ケ 筒も竹筒も同じし事しや程にけふこふハそふ心得へい 大 左様の事とも存ませすよしない論を致お山へ遅ふなりました迷惑に存升 大 夫ハ身共が任せて置ケ 扱某も是迄出て唯帰るも如何ちや 其上今の御酒ハ酔ふた程に目出度一トさし舞ふて兩人をお山へ連れて行ふそ 河 夫は有かたふ存升 大 万代をかけつき候へ 三段之舞 やらく目出度やくな むかしか今に至る迄筒も竹筒も同じ名の八をく四千七ツちん万宝箱崎のいにしへもみな此山に納るのりのく鳩の峰こそ目出度けれ

昆布柿

アト 是ハ淡路の国の御百姓て御さる 毎年上頭へ御年貢として淡路柿を捧る 当年も持つて登ふと存る 誠ニ毎も
とハ申なからか様に相替らす上ると申ハ嬉敷ひ事ちや 何卒首尾よふ納たい事ちや イヤ此辺りへ来たれハ殊の外く
たふれた 是ニやすらうて居て似合敷者も参らハ同道致そふと存る シテ 是ハ丹波の国の御百姓て御座る 毎年御嘉
例として昆布を捧る 当年も持つて登ふと存る 誠ニことしハ余の者に持つて登れと申たれ共是悲ともと申ニ依て登る事
て御さる 何卒首尾よふ納たい物ちや イヤあれへ一段の者か参る 言葉をかけう ヤアのふく ハア此
ほふの事て御さるか イカにも其方の事ちや そつしなからとれからとれへ行かせらるゝ 先某ハ用を前に
あてゝ跡から先へ行者ちや イヤ爰な者か 誰有て用を後口に当て前から跡へ行者か有ふ 心実たおしやれ
ベ 先其方ハ 某ハ都へ登る 某ハ京へ行 夫ハ幸の事ちや 同道致そう 身共も独りて淋しう
御座つた 成程同道せう 左右あらハそなたから行かしませ 何か扱先行かしませ 身共から行ふか
一段とよからう さあゝ御座れ 心得ました 誠ニふと言葉を懸たに早速同心めされて此よふ
な嬉敷事ハない 言わせらるゝ通り牛ハ牛連れ馬ハ馬つれと（いふ）其方もお百姓身共も百姓此様な似合たつれ
ハ御座るまい 扱其方の国はとこ元ておりやる 某ハ淡路の国のお百姓て御さる 毎年上頭へ淡路柿を捧る
当年も持つて登る事ちや 扱ゝ太儀ておりやる 扱そなたハ 某ハ丹波の国のお百姓て御さる 毎年
嘉例て上頭へ御年貢として昆布を捧る 当年も持つて登る事ちや 夫ハ太儀て御座る 此上ハあわれみたちか一所
てあれかし 下り二も同道しとうおりやる たとへみたちハ違ふとも互に待合て同道せう イヤ何角といふ
内に某の上る御館ハ是ておりやる そなたの上る御館ハ是ておりやるか お主の上るみたちハ是てハないか
またつうとかみておりやる 其様な事ならハ道てお茶をも申さふ物を 最前もいふ通り此所に待合て

下り二も同道するておりやろう 一段とよふろう もふこふ参る 御行きやるか さらハ
シとハいミたいか身共か上る館も是ておりやる 扱くされ事をはたさぬ人ちや 扱其方ハ時のお奏者か引
 付かあるか 身共ハ時の御奏者ちや 夫ならハ身共は申上ふ それ二待しませ 心得た 物申案内
 申 御座り升かく ソラ者 ヤイ ハア 汝は何者ちや 淡路の国の御百姓で御さる 例年之通り
 あわち柿を捧升ス 御前の首尾を頼ミ上升 御蔵の前へ納ませい ハア 正面へ出テ ヤイ 汝までか
ア今壹人丹波の国のお百姓か御門前にひかへており升 一所に申上ふ 是へ出よと言へ 畏て御さる
 のふくお居やるか 何と納メさしましたか いかにも納ておりやるか某斗かと被仰た二依て其方の事を申
 上たれハ一所に申上ふとある あれへ出さしませ 心得た シテお奏者ハとれ二御座る つうと奥に御さる
シ成程合点ちや 如常扇開 物申案内申 ハア此辺りにハ御座らぬそふな 御さり升かく ヤイ
ハア 引 汝は何者ちや 丹波の国のお百姓で御さる 御嘉例之通り一万くわん御奏者へ
 三百くわん差上升 御蔵のまへ江納ませい 畏て御さる 如常 のふく 納メさしましたか
シ御奏者ハ奥にお座るとおしやつた二依てつかくといてよいきもをつふした 最前な奥に御座つたれ共又
 口へ出させられた物て有う 淡路丹波両国の御百姓斯の通りハア 引 ヤイ ハア
シ両国の御百姓是へ出ませい ハア 両国の御百姓御前に 淡路丹波国を隔たてたる所同日の同
 時に持て登る事御満足に思召 左右あれハ永代まんそう鬨を御赦免被成る、難有ふ思ひませい 夫ハありかた
 ふ存升 扱銘ミの捧物に付て哥を一首ツ、兩人してよめと被仰出た いそいてよみませい 是ハ迷惑に存升
シ有かたふ存升 汝ハ何と聞た 私は銘ミの捧物に被下る、と承りました 汝ハ亦何と聞た
 私は銘ミの捧物にて哥を一首ツ、よめと承りました 如何二も其通りちや 急てよみませい それハ迷惑に
 存升 何卒お奏者のお取りなしを お願い申升 イヤ 被仰出た事をひるかへす事ハならぬ 早ふよ
ア左様ならハ畏て御さる ア、是くお主ハもはやお請を申さしましたか 是悲共と被仰る、二依て

御百姓の名をハ何と申そ

是ハ津の国の御百姓て御さる 毎年御嘉例として上頭へ御年貢ニ初雁を捧る 当年も持て登ふと存る 誠ニ去年持て登たを近い事によふに存た二早一ト年ニ成た事ちや 是迄来れハいかう草臥た 是に休ふて居て似合敷者も通らハ詞をかけ同道致して参らふと存る 是ハ和泉の国の御百姓て御座る 毎も上頭へ御年貢を捧る 当年も持て登ふと存る 誠に当年ハ余の者に持て登れと申たれ共是非共某に参れと申ニ依て夫故参る事ちや イヤあれへ一段の者か通る 詞を掛ふのふく 此方の事て御さるか 如何ニも其方の事テコサる とれからとれへ行し升 先ツ其方ハ 某ハ津の国の御百姓ちや 毎も上頭へ御年貢納に登る 当年も持て登る事ておりやる 夫は太儀ニよう登らしますのふ 扱其方ハ 某ハ用を前にあてて跡から前へ行者テおりやる 誰有て用を後に当て先から跡へ行者か有う 包まつともいわしませ 某ハ其方の隣(ママ)の者ちや 隣(ママ)でハ見なれぬか誰ておりやる 和泉の国の御百姓ておりやる ムウ国隣りといふ事か 中く 何ゆへ登らし升 某も上頭へ御年貢を捧る事ておりやる 夫は大儀能う登らし升 其方ハ御年貢に何を上ケさし升 某は雁ておりやるか其方の持たハ何ちや 其事ちや 是を持て登れといふて在所の衆かおこされた 中は知らぬ 夫は兎も角あれいさ同道申そう 某も独りて淋敷う御有た 如何ニも御同道申そう 左右あらはいさ御され何ケ扱そなたから御され 某から参ふか 一段とよふ御座らう サアく来さしませ 心得ました 扱ふと詞を懸たに早速御同心めさつて此様な嬉敷事ハない 世にハ似合ぬ連も御さるに牛ハ牛つれ馬ハ馬つれとやら申て其方も御百姓某も百姓此様な似合た連は御さるまい あわれ御立か一所てあれかし 下りニも同道したい事ちや 如何ニもたかに御館ハ違ふ共互に待合て御同道申そう イヤ何角いふ内に某か上る御館ハ是ちや 某ハつうとあれておりやる 某様な事を知たらハ道て御茶をも申そう物を 帰りニ

待て居さしませ 〱 心得ました 〱 某は参ふ 〱 さらハ〱〱とハ言ミ度か某の上る御立も是ちや 〱 扱
〱 され事をはたさぬ人ちや 其方ハ時の御奏者か引付かあるか 〱 某ハ引付か有る 其方から納さしませ 〱
心得た 物申案内申 〱 案内ニハ何者ちや〱 〱 和泉の国の御百姓て御座る 御嘉例の通り御年貢に初雁を捧
升 御蔵の前へ納めませい 〱 畏て御さる 〱 汝迄か 御門前に壹人扣て居まする 〱 一所に申上ふ 是へ
出よといへ 畏て御さる 右のシカノ内ニ 扱〱あれ程初雁を捧る物を最前ハ中ハ何やら知らぬといふた サア〱御
機嫌かよい通らしませ 〱 お主ハ能某をたました 身共ハ申上様か有る 申上まする 〱 何者ちや 〱 私ハ津
の国のお百姓て御さる 御嘉例の通り初雁金を捧ケ升る 〱 何ちや初雁ちや 〱 ハア 〱 御蔵の前へ納メませ
い 〱 畏て御座る 〱 汝迄か 〱 左様て御さる 〱 御門前に扣て居よ 〱 畏て御座る 〱 何と納めさし
たか 〱 如何ニも納メた 餅酒ノ通り奏者披露スルナリ 〱 ヤイ〱〱両国の者 〱 ハア 〱 仰出さる、ハ両国の者同し日の同
し時に持同し物を納メ壹人ハ初雁という壹人ハ初雁金という名の違ふた事曲事に思召 兩人共此の子細を語れと仰出
された 急て申上い 〱 夫、お主か替た事を申上たニ依てあの様に仰付らる、 某ハ知らぬぞ 〱 お主か某をた
ましたニ依ての事ちや 〱 イヤ〱〱お主かこひた事をいふたニ依てちや 〱 ヤイ〱〱 扱〱〱悪ひやつ の 御前
へ近所て高声て争ふ 慮外なやつ の 銘、早ふ子細を語れ 畏て御さる 〱 扱も八幡太郎義家安陪の貞任を御追罰
の御為に討手の大将を給りて吾妻の旅に趣き給ふ されハ有る野を御通り有りしに雁一村羽を乱す 八幡殿御覧して
つわ者野に伏す時ハ帰雁行を乱すといふ此の心を持て扱ハ此の野ニ御敵籠りけん 急き武の具をしさかせと有し時頓
而武の具をしさかされしかハ案のことく御敵キ籠り居たりしをやす〱と責亡し給ひ天下一統の御代にと成も此の帰
雁行を乱すと言御心の徳なり 亦秦シンの始皇シコウの内裏にも雁門なくハ過ぎかたしと見へたり 蘇武か胡国に有し時雁に文
をこつくる 夫より文を雁書(ハ)をいミ使を雁使と名付たり 其外帰雁旅雁平砂の野落雁と社なれ 一つのならいに帰
雁金旅雁金とハ承す候 〱 一段とよふいふた サア〱〱汝も語れ 〱 心得ました 扱も住吉の神主か国綱の御哥
ニ薄墨にかく玉章ツサと見ゆる哉霞めるそらに帰る雁金 仙洞此由を聞し召れ夫よりも住吉の神主を薄墨の神主と申 亦

ある時に日翻^{ヒルカヘセ}白浪ヲ花千ン片ン雁^{アシテ}転^テ青天字一行月ハ都花ハ越路や増らん秋来て春ハ帰る雁金 其外雲井のかん
 うハの空のかんとハ承す候 是も一段とよふ言た 両国の御百姓斯の通り ハアくくくヤイくハア
 左様な事ハ中く汝等か知るまいと思召て御笑草に被仰出た事を早速申上て御満足ニ思召御ほふひに永代万増
 公事を御赦免被成御流を被下る、是へ寄て吞メ 夫は難有ふ存升る^{奏者酌スル 餅酒ノ通り}
 中を舞下りに下れと被仰出た 左右心得い 畏て御座る 最早参り升る 行か ハア によふ来た
 ハア 何と一段の仕合てハないか 思ふ儘の首尾ちや かる目出度折なれハ洛中を舞下りに下
 れと被仰出た イサ和歌を上ふ 一段と能かろう かり金のつはさや文字をならふらん 帰雁つらをや乱すらん
 三段之舞 やらく目出度や目出度や何れの詩哥を引合すれハ 雁 雁金 かり金と言も同じ名の雁金と言も同
 し名の雁くい成こそ目出けれ

替り仕様

やらく目出度や目出度やな年の始のお祝物の美物山海の珍物取くのおさかなまいる人も民もたのしむ秋の田の
 かり金 かんくい きん鳥も参る千年の鶴のよはいをたもちて上壹人より下万民迄く雁くい成こそ目出けれ

三人夫

アハシアト 是ハ淡路の国の御百姓て御さる 毎年上頭へ御年具を持て登る 当年も持て登ふと存る 誠ニ毎年く相
 替らすケ様に御年貢を納ると申ハ目出度事ちや イヤ是迄来たれハ殊の外草臥た 是に休ふて居て参ふと存る

ヲハリアト 是ハ尾張の国の御百姓で御さる 毎も上頭へ御年貢を持て登る 当年も持て登ふと存る 誠ニ当年ハ余の者に持て登れと申たれ共某ニ是悲共といふたに仍て夫故持て登る事ぢやアハシ イヤあれへ一段の者か通る 詞をかけふ ヤアのふくのふそこな人ヲハリ ハア此方の事で御さるかアハシ 如何ニもそなたの事ぢや 卒しなからとれからとれへ行かしますヲハリ 某ハ都へ登る者で御さるアハシ 夫ハ一段で御さる御同道申かヲハリ 某も独りて淋敷う御座つた 如何ニも御同道申ませうアハシ 左右あらハイサ行かしませヲハリ 何か扱先行かせられいアハシ 某から参ふかヲハリ 一段とよかうアハシ サアく来さしませヲハリ 心得たアハシ 誠ニふと言葉を懸て御さるニ早速同心のお召やつて此様な嬉しい事ハ御さらぬヲハリ 某も独りて淋しう御さつた 此様な悦しい事ハ御さらぬアハシ 何と都迄ハ間も御さらふ ちと休て参るまいかヲハリ 一段とよふ御さらふ サツクミノシテ 是ハ美濃の国の御百姓で御さる 毎年上頭へ御年貢を捧る 当年も持て登ふと存る 誠ニ去年登たを此頃によふニ存たニ早や一年せに成た事ぢや 月日の立ハ間もない事で御さるアハシ あれへ某共のよふな者か通る升 詞を懸升まいかヲハリ 一段とよふ御さらふ ヤアのふくのふそなた人ミハア此方の事で御さるかアハシ 如何ニも其方の事ぢや そつじなからとれからとれへ行かし升ミ 某ハ先ツ用を前二当て跡から先へ行者ぢやアハシ イヤ爰な人か 誰有て用を後ろに当て先から跡へ行者か有ふか 心実をおしやれミ 先其方ハアハシ 某ハ淡路の国の御百姓で御さる 上頭へ御年貢を納に登る事で御りやるミ 扱そなたハヲハリ 某ハ尾張の国の御百姓ぢや 某も御年貢を上頭江持て登る事ておりやるミ 扱くそれハ太儀ておりやるヲハリ 此方ハとこの人ぢやミ 某ハ此方の隣りのものぢやヲハリ ハ、アとなりニハ見知らぬか誰ておりやるミ 美濃の国の御百姓ぢやヲハリ ムウ国隣りといふ事かミ 中くアハシ 何故登らしますミ 毎も上頭へ御年貢を納に登る事ぢやアハシ 是ハ幸ぢや 御同道申そふ物をミ 某も連かほしう存た 如何ニも御同道申ませうアハシ そふあらハイサ御座れミ 何か扱先各方から御されアハシ 某共から参ふかミ よふ御さらふアハシ サアく来さしませニ 心得ましたアハシ 誠ニ幸の人と同道致て賑ミ敷う都へ登る事で御さるミ 世にハ似合ぬつれも御さるニ牛ハ牛つれ馬ハ馬連と申かこなた方も百姓身共も百姓此よ

ふな似よふた連ハ御さるまい^{ヲハリ} いか様是は申合たよふなつれて御さるのふ^{アハシ} いわせらるゝ通りて御さる
^{アハシ} イヤ何角といふ内に某の上るみたちハ是て御さる^{ヲハリ} 某も是て御さる^ミ 是ハ如何な事 其方^ハの上
 るみたちハ是て御さるか^{ニハ} 左様て御さる^{アハシ} こなたハとれて御さる^ミ 某ハつうとあれておりやる^{アハシ}
 其様な事と存たらハ道てお茶をも申そふ物を^ミ 左様ならハ下りニも各方待て居さしませ 御同道申ませう^{ニハ}
 如何ニも待ませう^ミ 最斯ふ参る^{ニハ} お行きやるか^{三ハ} さらハ^ハと^ミとは言ミたいか某の上るみ
 立も是ておりやる^{アハシ} 扱^ハされな事をはたさぬ物ちや 其方ハ時の御そふ者か引付か有るか^{貳ハ} 某ハ時の御
 そふ者ちや^{アハシ} 某ハ引付かある 身共から納ふ程にそれニ待しませ^{ヲハリ} 心得た^ミ 納さしませ^{アハシ} 物申
 案内申^{ソヲ者} ヤイ^ハ何者ちや^{アハシ} 淡路の国の御百姓て御さる 毎年の通り御年貢を持て登りました 御上
 の首尾を頼ミ上升^ハ 御蔵の前へ納メませい^ア 畏て御さる^ハ して汝迄か^ア 今兩人御門前ニ扣ており升
^ハ 一所ニ申上ふ程ニ是へ出よといへ^ア 畏て御さる^ハ のふ^ハお居やるか^{ニハ} 何と納さしましたか^ア 今
 納ておりやるかそなた方の事を申上たれハ一所に申上ふとの事ちや あれへ出さしませ^{ニハ} 心得た^ハ して御奏者ハ
 とれに御さる^ア つうと奥に御さる^{ニハ} 心得た^ハ 物申案内申^ハ ハア此辺りニハ御さらぬそふな
^ミ 其通りちや^{ニハ} 御さり升か^ハ ヤイ^ハハミア引^ハ 汝は何者ちや^ハ 尾張の国
 の御百姓て御さる^ハ して汝ハ^ミ 美濃の国の御百姓て御さる^{ニハ} 毎年の通り御年貢を持て登りました 御前
 の首尾を頼ミ上升^ハ 御蔵の前へ納ませい^{ニハ} 畏て御さる^ハ さあ^ハ納メさしませ^ミ 心得た^ハ し
 て汝迄か^{ニハ} 左様て御さり升^ハ 左右あらハ申上ふ程に御門前に扣ていよ^{ニハ} 畏て御さる^ハ のふ^ハお居
 やるか^ア 何と納メさしましたか^{ニハ} 納メさしましたか御奏者ハ奥に御さるとおしやつたニ依てつか^ハと居て
 よい肝をつふした^ア 最前な奥に御さつたれ共亦口へ出させられた物て有ふ^{ニハ} そふてあらふ^ハ 淡路尾張美
 濃の者かくの通りハア^ハ引^ハ ヤイ^ハ三ヶ国の御百姓此へ出ませい^{三ハ} ハア^ア 三ヶ国の御百姓
^{ニハ} 御前に^ハ 仰出さるゝハ淡路尾張美濃海山川をへたてたる所を言合て登る共違ふ事ちや 同日の同時に持て

登る事御かん二思召ことに御哥の会に持て登りおゝた事なれハ三ヶ国の御百姓に銘ミの国によそへて三人して哥を一首読と仰出された 急て詠ませい ア 是ハ迷惑ニ存升 ミ ありかたふ存升 ヅ お主ハ何と聞た ミ 私は御歌の会の折からなれハ捧者を銘ミ江被下るゝと承りました ヅ そふてハない 汝ハ何と聞た ア 私は御哥の会に登りました二仍而銘ミの国によそへて歌をよめと承りました ヅ 私も其通りて御さる ヅ 如何ニも其通りちや 急てよめ ミ 夫ならハ迷惑に存升 ヅ いったん仰出された二依てひる返ス事ハならぬ 急て詠ませい ア 左様ならハ心得ました ア こふも御さりませうか ヅ はや出たか ア 淡路より ア 吟スル ア 種有そめて三ツ葉さし ヅ 一段と出来た さあゝ汝もよめ ヅ こふも申されませうか ヅ 何とちや ヅ 花咲尾張 ヅ 吟スル 是も一段とよふ出来た 汝もよめ ミ 私ニもよめて御さるか ヅ 中く ミ 心得ました 花咲おわり ヅ 夫ハ尾張の者の哥ちや 汝か国によそへてよめ ミ すれハあの者の哥を申事ハ成ませぬか ヅ 中く ミ 是ハ六ツケ敷物て御さる 先案て見ましよう ヅ 免も角もして早ふ読よめ ミ 心得ました こふも申されませうか ヅ 何とちや ミ 美濃なるハ稲 ヅ 扱く是もよふ出きた 三ヶ国の御百姓斯の通り ハアゝゝゝ引 ヤイゝ ミ ハア ヅ 御笑草二被仰出たを奇特に申上たと有て御機嫌に思召 夫ニ付て印おかるゝ為ちや 銘ミの名を申上い ア 私の名ハ通治と申升 ミ 何辻ちや 爰の辻か ア あれかわさと申升 通治て御座り升 ヅ 汝か名ハ ヅ 罷次と申升 ヅ 何ちやまけちや 此のまけか ア イヤமாகして御さる ヅ そちも申せ ミ 是ハ参郎 ヅ 是江参つて居る程に名を申上い ミ 私の名は是ハ参郎と申升 ヅ 扱くこひた名ちや ミ 其通りて御座る 二人笑 ヅ 三ヶ国の御百姓斯之通り ハアゝゝゝ引ヤイゝ ミ ハア ヅ 面白い名をつけたと有て御機嫌に思召 夫ニ付て銘ミの名によそへて最一首三人して読との御意ちや 急てよみませい ミ お主かこひた名を付た二依てちや ア お主かこひた名を付た二依てちや ア お主か名ハ変た名ちや ヅ 又そちもおかしい名ちや ヅ ヤイゝ ミ ハア ヅ たかひニ論ハむやくちや 急てよみませい ミ 畏て御さる ア あわしより多くの宝通治船 ヅ まかちかこいて ミ 是ハ参郎 ヅ 一段とよ

ふ出来た 三ヶ国の者かくの通り ハアくくく引 お笑草に被仰出た事を一段と出来て御かんニ思召 前
 ミ被下た事ハなけね共お流を被下る、 是へ寄て頂戴致せ 三人 夫ハ難有ふ存升 ヲ さあく吞め ア 御座り升
 く ヲ 汝も吞め ヲ 御さり升く ヲ そちも吞め ミ 忝ふ存升 ヲ 丁度くくく ヲ 御さり升く
 ヲ 最一ツ吞め ア 是ハありかたふ存升 ヲ さあく吞め ヲ 是ハ慮外ニ存升 ヲ さあく汝も吞め
 ミ ヲ 御さり升く ヲ ひ、ちかへて三盃ツ、吞め ア 是ハ度くありかたふ存升 ヲ 丁度く ヲ 御さり升く
 さり升く ヲ そちも三盃吞め ヲ 重く難有ふ存升 ヲ 丁度く ヲ 御さり升く ヲ 扱最早御暇を被下る、間勝手次
 め ミ 是ハけつこふな御酒で御座る ヲ 丁度く吞め ミ 御さり升く ヲ 扱最早御暇を被下る、間勝手次
 第二下りませい 三人 ハア ヲ 又目出度折からなれハ洛中を舞下りニせいと仰出された 左右心得い 三人 畏て御
 さる 三人 左様ならハ最斯ふ参り升 ヲ 最早行か 三人 ハア ヲ よふ来た 三人 ハア ア 何と一段の首尾てハ
 ないか ヲ 思ふ儘の首尾ちや ミ イサ和哥を上て帰ろう 二人 一段とよかろう ミ 目出度かりける時とかや
 三段舞 やらく目出たや目出たやな 三人同 納る御代のしるしとて国ミよりも参る貢きいく久しさも限らなくも
 ふかきらしと申納て帰りけり

仕替の和哥

皆人のつかさ位のまさるニハかわらけわれて末さかへけり

引敷簪

是ハ此辺りの有徳な者て御さる 今日ハ最上吉日なれハ聶殿が見ゆる筈ぢや 先太郎官者を呼出し申付ふと存
太郎官者あるか 本 ハア 舅 居たか 本 御前ニ 舅 汝呼出ス別の事てない 今日ハ最上吉日なれハ聶殿
か見ゆる筈ぢや わせたらハ此方へ言へ 本 畏て御さる 舅 エイ 本 ハア 舅 エイシテ 舅ニかわゆから
る、花聶て御さる 今日ハ最上吉日なれハ聶入を致そうと存る 乍去某ハ素袍はかまか御座らぬ 爰に某にお目を被
下る、お方か御さる 是へ参て袴をかつて聶入を致そうと存る 誠ニ日比御心易御出入致ニ依て某の事なれハ御内に
ない物ハ調へても借して被下る、て御座らう か様に御無心ニ参ると申ハ悪敷事なれ共外ニ御無心申御方か無ひニ依
ての事ぢや イヤ何角といふ内にはぢや 先案内を乞ふ 物申案内申 アト イヤ表に案内か有る 案内ハ誰そ
ハア私て御さる ア エイ誰そこそ思ふたれそなたならハ案内なしニ通りハせいて何と思ふてお出やつた 只
今参るハ別の事ても御さらぬ 目出度事か御座り升 ア 夫ハ何事ておりやる ベ 私は今日聶入を致升ス ア 扱
くそれハ目出度事ぢや ベ 夫ニ付てまして御無心に参りました ア 夫ハよふこそおりやつたれ何成共心置のふ
おしやれ 聶入ニハ畢竟外聞づくぢや 弓成共鎗なり共入らハ借してやらふそ ベ 夫ハ忝ふ存升 私の事て御され
ハ左様な者ハ入ませぬ 私も素袍は御座るか袴か御さらぬ 何卒袴をおかし被成て被下りよふならハ忝ふ存升 ア
何にそこそ思ふたれ安い事ぢや 借てやろうそ 夫ニお待やれ ベ ハア忝ふ存升 ア ヤイくとれ成共袴を持
て来い シヤア其通りを言おう のふくお居やるか ベ 是におり升 ア 安い事てハあれとも一具ハ去方へかせ
たといふ ベ こなたの御袴の二具や三具ハないと申事か御さりませうか 其上古ふとも苦敷う御さりませぬ ア
夫ならハ最一度尋て見よふ ベ 夫ハありかたふ存升 ア ヤイくちと古ふても苦敷うないといふ シヤア又其通
りをいおう のふく ハア ア 一具ハ有をといて置たといふわいの ベ すれハ御さりませぬか ア 中
く 扱く気の毒な事て御さる 私は此方ニて借ませうと存て心当に致て参つて御さる 何とも苦敷し事て御
さる イヤ近頃申兼て御さるか此方の一つ御さるを借して被下る、事ハ成ませぬか ア 成程安い事てハあれとも只
今町の寄合ニ某か出て叶わぬ 気の毒なからはハならぬ ベ 御町へ御出被成る、を是悲共とも申されす又袴か御

さらいてハ聳入ハ成ませす外ニ御無心申御方ハ御さらす是悲ニ及ませぬむねんなから聳入を致升スまい物よ
 〽夫ハ笑止な事ぢや 何卒聳入をさせておましたい物ぢやか ヤイ〽鹿相な袴ても苦敷ないか最早ないか 何ち
 や素袍がある ヤアのふ〽素袍があるといふか袴のよふニ着さし升か 〽あの素袍かあるといふ袴のよふニ着ら
 れ升か 〽着る物てハなけねとも才覚を以て袴のよふニ着せてやらふ着て見さしませ 〽左様ならハ着て見ませ
 うか 〽一段とよからう 先夫ニ御待ちやれ 〽心得ました 〽是〽ハア 〽着てお見やれ
 シテ受取 〽心得ました 是か何となりませう 〽左右てハない 先是へ足を入さしませ
 ヒロケ色ミトスル 〽一段とよふ御さり升 〽何とよからうかや 〽左様で御さる 〽ヲ、其儘の袴
 テットウテ両袖エ足ヲ入レホヲ 〽忝ふ存升 ひとへニ此方のおかげで聳入を致事で御さる 〽夫ハ身共も満足致ておりや
 シ布ニテクミリ後口ニテ結フ 〽左様で御さる 〽何と見 〽何と見
 〽扨舅か引出物を夥敷用意致されたと承りました 〽最早御行きやるか 〽ハア 〽よふおりやつた 〽ハア
 を待てあらふ 〽最斯ふ参ります 〽何て御さる 〽いかにしても後ろかすまぬ物ぢや 〽申テ手ヲ廻シ
 言テ行ヲ後口カラ 〽ヤア是〽 〽何て御さる 〽夫ハ忝ふ存升
 見テヨヒモトス 〽其通りぢや イヤ思ひ付た 爰に引敷か有か是を当てお行やれ 〽夫ハ忝ふ存升
 ともない物て御さり升か 〽心得た 先夫にお待ちやれ 〽畏て御さる 〽是〽これを当て、行かしませ
 左様ならハ御借被成て被下 〽心得た 〽か様に当てハ参りませうか舅か狂かつたなりぢやと申され升まいか
 〽是ハ慮外て御さる 〽アト後口エアテミ 〽若シ又ふしんなどといわ、今日ハたか野に参つて野かけから直に参つたとおしやれ 〽左様に申たらハ尤ぢや
 〽若シ又ふしんなどといわ、今日ハたか野に参つて野かけから直に参つたとおしやれ 〽左様に申たらハ尤ぢや
 と思われませうか 〽そふさへおしやれハ聳入ハさつと済たといふ物ぢや 〽申ても〽御礼ハ尽されませぬ
 何卒首尾よふ勤まして急度御礼ニ参りませう 〽近頃目出とふこそあれ何かの物語ハ重而ゆるりと聞ふそ 〽扨
 最斯ふ参り升 〽お行きやるか 〽ハア 〽よふおりやつた 〽ハア 〽のふ〽嬉しや さつとすん
 た 先急て参ふ 誠ニあの様な頼母敷御方ハあるまい 早速聳入の成るよふニして被下た イヤ何角いふ内にはぢや
 先案内を乞ふ 物申案内申 〽イヤ表ニ案内か有る 案内ハ誰そ 〽そちハ是の太郎官者か 〽左様で御さ

角
 扱へ 出来ました 逆の事ニ相舞を舞ませう
 角
 兎も角もて御さる 兩人前ノコトクヨロコビヲ
 謡也左右ツユトリ

サシ廻シカサシテ廻 舞様心得アルヘシ 太郎官者聳殿ニハ尾かある 誠ニ何やら御さり升 南無三宝見付
 ルトキ舅尾を見ル あのはし知らすめ 面目ない ゆるして被下 何の面目ない やるまいそく 三段ノ舞
 られた 舅 舅連舞ノ時シテサシ廻ス時舅 太郎官者聳殿ニ尾かある 誠ニ左様で御さる 興かつた者ちやナア あき
 聳ノ後ヲ見付舞トメル 南無三宝見付られた 舅 また其つれをいふ とつと、お帰へりやれ 面目も御さら
 れもせぬ事て御さる 舅 ぬ 聳入ル舅太郎官者ト入ルナリ 右ノ仕様もヨシ

シテ 聳 のしめ 土烏帽子 少刀 扇 素袍ノ上斗り着テ出ル

アト 舅 長上下 ワキ狂言ナラハ素袍ニても

同 教人 長上下

同 太郎官者 半上下

入用 引敷 素袍上斗り

桂桶 ふた

懷中聳

舅 是は此当りの者て御さる 今日ハ最上吉日なれハ聳殿が見ゆる筈ちや 先太郎官者を呼出シ申付ふ 太郎官者
 あるか 如常 汝呼出ス別の事てない 今日ハ最上吉日なれハ聳殿が見ゆる筈ちや 夫ハお目出度ふ存
 升 舅 わせたらハ此方へ申せ 畏て御さる エイ ハアシテ 是ハ舅にかわゆからる、花聳で御座る
 今日ハ最上吉日なれハ聳入を致す様ニと申て参た 聳入ニハさまくしき作法の有と申 某ハ物事不調法な 又爰

に御心易ふ参る御方に物事御功者な御方がある 是へ参つてしき作法をならいすくに聳入を致そふと存る 誠ニ此様な事と存たらハ常々心かくれハよかつたものを指当て難渋を致す事ちや イヤ何角と云ふ内にはちや 先案内を乞う物申案内申 ^ア ^ト (イヤ)表ニ案内がある 案内ハ誰ぞ ^ハ ^ア ハア私て御さり升 ^エ ^イ エイ誰よふこそおりやつたれ 先はきれいな出立ておりやる ^ベ ^ク 何とくくくくよふ御さりませうかの ^ア ^ク 其方か是へ来初めてからつい二見ぬきれいな出立ちやかよふすはしおりやるか ^ベ ^ク きれいなこそ道理なれ私は今日聳入を致升ス ^ア ^ク やれく其様な事とハ知たらハ前広から用をも聞ふ物を ^ベ ^ク 夫故御無心に参りました 聳入ニハさまく式作法の有物ちやと申 私ハ御存の通りかたのことく不調法ニ御さる 式作法を教へて被下りやうならハ忝ふ存升 ^ア ^ク 某も其様な事ハ空てハ覚へぬ 物の端に書て置た 見ておませう 先夫にお待ちやれ ^ベ ^ク 夫ハ難有ふ存升 ^ア ^ク 扱ミうつけた事を申て参つた 聳入をするに何事か有ふ あのとよふな物ニハ常躰の事を教へてハ面白ふない 後々の笑ひ草に成るよふニ教てやらふと存る のふくお居やるか ^ベ ^ク 是におり升ス ^ア ^ク 書た物を見ておりやるか 大昔中昔当世様と申て有る 何れを教へてやらふぞ ^ベ ^ク 先以て難有ふ(存升ル) 大昔ハ余り古ふ御さる 中昔もむかし成 兎角物事当世よふと申程に其当世よふの聳入を教へて下され ^ア ^ク 扱く其方ハ聳入をしやる程有てふんへつ迄かあかつておりやる ^ベ ^ク おはつかしう存升 ^ア ^ク 当世様の聳入といふハ別の事でもない 何成りとも引出物が出よふ 夫を懷中する事ちや ^ベ ^ク かいちうとハ何の事て御さる ^ア ^ク 何にても舅殿からくれらる、物をふところへ入る、を懷中といふ ^ベ ^ク あのとよふところへ入る、斗りてよふ御さるか ^ア ^ク 是か則当世様の聳入ておりやる ^ベ ^ク 夫ハ忝ふ存升 舅か引出物を大分用意被致たと承りました 帰りましたらハおそ、分を申ませう ^ア ^ク 必すそ、わけを待ておりりやらふぞ ^ベ ^ク 左様ならハ最う斯ふ参り升 ^ア ^ク お行やるか ^ハ ^ア ハア ^ア ^ク よふおりやつた ^ベ ^ク ハアのふく嬉しやく先急て参ふ 誠ニ聳入ニハ窓からも垣からも目斗りちやと申か某ハ当世様の聳入を習ふて行くからハそつ共おくする事てハないぞ イヤ何角と言ふ内にはちや 先案内を乞ふ 物事案内申 ^本 ^ク イヤ表に案内がある 案内ハ誰ぞ ^ベ ^ク そちハ是の太郎官者か ^本 ^ク 左様て御座る こなたハ殿方て御さる ^ベ ^ク 聳か来たとおしやれ ^本 ^ク 畏て御さ

る ハア申上^舅升^舅 何事ぢや^太 髣髴様の御出^舅て御さる^舅 何髣髴かわせたといふか^太 左様^舅て御さる^舅 こ
 ふ御通り被成いと^太言へ^太 畏^太て御さる^太 ハアこふ御通り被成いと申され^舅升^舅 心得^太た^太 ハア髣髴様の御出^舅て御
 さる^舅 エイ髣髴殿^舅 不案内に御さる^舅 初対面^舅て御さる^舅 私もとふ髣髴入^舅を致とう存^舅ましたれとも何かと
 隙^舅を得^舅いて遅^舅りました^舅 其方^舅の御ひまのないハ聞^舅及^舅ひました^舅 太^舅郎官者御盃^舅を出^舅せ^太 畏^太て御さる^太 此間シカ
 くアリ^太 お盃持^舅ました^舅 髣髴殿参^舅らぬか^舅 先参^舅つて被^舅下^舅 左右あらハ初メ^舅ませう^舅 よふ御座^舅りま
 せう^舅 太^舅郎官者つ^太け^太 心得^太ました^太ツカセ^舅 扱^舅是^舅を髣髴殿へ進^舅しませう^舅 頂^舅きませう^舅 太^舅郎官者持^舅
 て行^太け^太 畏^太て御さる^太 一ツ上^舅りませ^舅い^舅 一ツ給^舅へませう^舅 丁度^太上^太りませ^太い^太 一ツあるそ
 くホ扱^舅くよい御酒^舅て御さる^舅 何とて御さる^舅 こふむもふからふいは^舅らを引^舅するよふに御さる^舅 お氣
 ニ入^舅つたらハ最^舅一ツ参^舅れ^舅 最^舅一ツ給^舅へませう^舅 よふ御さ^舅ろう^太 又^太一ツ上^太りませ^太 丁度^舅く^舅 ヲ、ミ
 あるそ^{ウケ}ノム^舅 扱^舅く吞^舅ハ吞^舅程よい御酒^舅て御さる^舅 氣^舅ニ入^舅て悦^舅ふ事^舅て御さる^舅 扱^舅是^舅を其方^舅へ上^舅ませ
 う^舅 頂^舅きませう^舅 太^舅郎官者持^舅て居^舅てくれ^舅い^太 心得^太ました^太 もはやつくな^太 心得^太ました^太ツカセ
 太^舅も一ツ参^舅らぬか^舅 最^舅早^舅被^舅下^舅升^舅まい^舅 左右あらハ取^舅ませう^舅 よふ御さ^舅りませう^舅 太^舅郎官者取^舅
 畏^太て御さる^太 申^舅付^舅た通^舅り髣髴殿へ進^舅せ^舅い^太 畏^太て御さる^太 只心^舅まで、御さる^舅 忝^舅ふ御さる^舅 弓ヲ持^舅一
 せらるゝと申され^舅升^舅 何に是^舅を私^舅へ下^舅さるゝ^舅 只心^舅まで、御さる^舅 忝^舅ふ御さる^舅 弓ヲ持^舅一
 せずハ成^舅まい^舅 クヒスシハカマノマチ杯^舅エ入^舅ル□^舅 髣髴殿ニハ何^舅をして御さる^舅そいナア^太 左様^太て御さ^舅り升^舅 是^舅を懷^舅中
 させられ^太と言へ^太 心得^太ました^太 申^舅くあれ^舅へ御出^舅被^舅成いと申され^舅升^舅 イヤ追^舅付^舅参^舅ふとおしやれ^太 畏^太て御
 さる^舅 ハア追^舅付^舅参^舅ふと仰^舅せられ^舅升^舅 何^舅をして御さる^舅隙^舅の入^舅事ぢやナア^太 左様^太て御さ^舅り升^舅 又色々シテ袖口
 大方こふて有^舅ふ^{舞台へ}出^舅ル^舅 何^舅を被^舅成^舅て御さ^舅つた^舅 イヤ人^舅か逢^舅ふと申^舅たに依^舅て居^舅て参^舅りました^舅 扱^舅此家^舅の作
 法^舅て御さる^舅 舞^舅を舞^舅せられ^舅い^舅 私^舅は舞^舅ハ不調^舅法ニ御さる^舅ゆるして被^舅下^舅 舅^舅そふ言^舅わす共大法^舅て御さる^舅程に是悲
 共舞^舅せられ^舅い^舅 左様^舅ならハ舞^舅ませう^舅 悦^舅ひニ又悦^舅ひを重^舅ねけ^舅り^{左右シテ}トメル^舅 イヤく^舅夫ハ^舅みしこふ御さる^舅 左

右して廻ツて長ふ舞せられい 最早ゆるして被下 舅 そふ言わす共是非共舞せられい 夫ならハ舅殿と連
舞に致そう 成程つれ舞に致そふ マエノコトク謡テ三段ノ舞シテ舅ノマネヲスル二段目ニ ト言ウテ舅ヲタミク追込ニナル
舅 何とさせらるゝゝゝ

シテ 如常

アト 舅 ミ

教人 ミ

太郎官者 ミ

入用 かつら桶

八尾

地極のあるしゑんま王くろさいにいさや

出よふ

是ハ地極の主ゑんま王です 近代ハ人間かしこ

成て浄土宗ちやといふてハそろりくゝとそろめく二依て地極の餓死以ての外ちや 夫故ゑんま王自身六道の辻に
出罪人か来たらハ取て服しやうと思ひ候 住なれし地極の里を立出てくゝ足にまかせて行程ニくゝ六道の辻につきに
けり 急間是ハはや六道の辻に付た 此所に居て罪人か来たらハ取て服しやうと存る 笛座へ づみを作らぬ罪人を
くゝ誰かハ寄てせめうよ 是ハ河内の国八尾の在所の者て御座る 某思わすも無常の風にさそわれ只今明土へおもむ
く 先そろりくゝと参らふと思ひ候 住なれし八尾の在所を立出てくゝ足にまかせて行程に六道の辻に着二けり 是
ハひようくゝと打ひらいた所へ来た 此広道を行ふか ア、人くさいくゝされハこそ罪人か来た 一トせめせめ

て取てふくしやう

いかに罪人夫地極遠きにあらす極楽はるかなり いそけくところ 拍子フミ

ヤイそこな

やつ汝ハ何者ちや

私は河内の国八尾の在所の者て御さる

最前から某の鼻の先へによきくと指出スハ何ち

や 八尾の地蔵よりのけ状て御さる

ムミ八尾の地蔵より折くけ状をおこさる、二ほうとこまつた あの地

蔵ハナア ヤイ此の事を人にいふなよ

畏て御座る あの地蔵ハとつとみめよしてあつた 此ゑんま王も折く無

心をいふた事がある 其よしみて折くけ状をおこさる、先せう木をくれい

畏て御さる タイコサヘイリ机木 持真中へ出ル

御机木是ハけ状て御さる

とれく先ハうハ書をかゝれた

何とて御さる

ゑんもしさま参る

地より 笑 汝も友くによめ

畏て御さる シテコレより 諷ひ

抑なんせんふしゆう河内の国

八尾の地蔵か

為にハ旦那 其名又五郎と申人の為にハ此罪人小舅となり

己ハ又五郎の為にハ小舅か

左様て御さり升ス

又五郎の女房もそちかつらに似たならハ思ひやらる、

イヤ私とハ違ひましてとつとみめよして御さる

笑 さあくよめ

我をしんして月まふてふくをそなへて手足をはこへハ我が為ニハ一の旦那成り 然

るへハゑんま王此罪人をハ九本の浄土へやりたまえ 夫をそむかハ地極の釜を蹴わるへし

ヲミこうけはつたる

罪人哉く此上ハちからなしくとて罪人の手を取てゑんま王の案内者ニて九本の浄土へおくりとミけ

いとま

申て罪人 あら名残りおしの罪人 又立帰へり罪人

あら名残りおしや罪人ヤとて鬼ハ地獄に帰りけり

こふけはつたる罪人かな

罪人の手を取て九本の浄土へ

暇申て

二人共ニ時宜 あら名残りおしの罪

人ヤとて 時宜スルシテ二返

あら名残りおしの罪人 時宜

又立かへり罪

廻り時宜

扇ニテアラキユウケンシテトメル時

宜仕様三度也

鬼 如常

罪人

水衣白コウシウソフキ 半クミル

入用

け状 杖竹 ハサミ持ナリ

折紙聲

／＼是は此辺りの者て御さる 今日ハ最上吉日なれハ聶殿か見ゆる筈や^(ママ) 先太郎官者を呼出し申付ふと存る 太郎
官者あるか 如常 汝呼出ス別の事てない 今日ハ最上俄二聶か見ゆる筈ちや 定而おなわか先へ見よふ二
依て聶殿の見ゆる時分ハしるゝてあらふ 又同道ニてわする事もおなわはこふ通そうす 聶殿ハ身共か迎に出よふ
供の者ハ汝よいよふニはからへ 畏て御さる 聶殿か見へたらハ此方へ言へ 畏て御さる エイ
／＼ハア 舅二いとおしからるゝ花聶て御さる 今日ハ日柄も能二依て聶入を致そふと存る 先女共を呼出そ
う 是の人ゝ居さし升か 童を呼はせらるゝハ何事て御さる 先こふお通りやれ 心得ました 扱
／＼先ハいかふ御機嫌かよふ御さる 機嫌の能社道理なれ 今日ハ弥聶入をせうと思ふての事ておりやる
夫ハ一段とよふ御さらふ あのほうからも又人か参つて御さる様にと申て参つた 身共も行ふと思ふて身拵へを
した 其方もよいか 童も拵ました 左右あらハ行ふ 其方から行かしませ 左様ならハ御案内の為二童か
ら参りませう 一段とよかろう さあゝ御出被成ませ 心得た 定て舅殿にハ某か聶入をする二依て
何角拵をせらるゝて有ふのふ 別におこしらやる事も御さるまい 乍去始めて行かせらるゝ事ちや程にさゝも肴
も念を入レらるゝて御さりませう おふるまやる物はそふ有ふか外二何も拵ハあるまいか 引出物二ハ何かなどと思わ
せらるれとも進する物もないと有てとミ様の秘蔵の刀とおわしなどを進せらるゝと聞きました 夫ハとこて出るそ
／＼盃の上て出るとあちの者か申ました 左右あらハ思ふさま酒を吞すハ成まい よふ御さらふ イヤ何
角といふ内にはて御さる 是ておりやるか 先童か参つて御座つた様子を申ませう 兎も角もおしやれ
／＼心得ました のふゝとミさま来ました エイおなわおりやつたか 聶殿ハ見へぬか 表二いられ升
／＼夫ならハ迎に出よふ イヤゝ結句わるう御座る 誰成共呼に出させられい 左右あらハ太郎官者呼

せう 〱 最早帰へらせらるゝか 〱 ハア 〱 よふこさつた ハア フキケンニテ出テ 橋懸リニタチイル 童も行きませう 〱 留め
とふ思へとも一所にいなしませ 扱是ハ料足百貫文のおり紙ちや 最前出そふとハ思ふたれ共外二重代の刀を逆もの事
に小金作りニしてやらふと思ふて細工屋へ遣したか俄てまた出来て来ぬ 重て遣ふ 折紙斗りハいな物ちやと思ふてわ
さと出さなんだ いんてから届けておくりやれ 〱 夫ハありかたふ思ひ升 成程心得ました 左右あらハもふこふゆ
き升 〱 お行きやるか 〱 ハア よふ御りやつた ハア ハシカミリヲ ムイテ 〱 さあゝいさ行ませう シテ女ヲミテキ ケンアシクスル
〱 なせに其よふ二不機嫌に御さる 〱 あの様なうそつきの所へ往て機嫌かよかう事ハ 〱 何にをうそをお
しやりました 汝共にうそつきちや なせについて来るそ 童もいに升るわいの 〱 とこへ 〱 とこへといふ事
か御さらふか 内へいに升 〱 身共か処へか 〱 左様で御さる イヤ爰な者か そちかよふな者を誰かよする物
ちや 〱 なせて御さる 〱 なせといふ事がある者か そちもうそつきちや二依て来る事ハならぬ 夫ハ誠に御さ
るか 誠にふてハ 〱 扱ゝ爰な非興な事を言わせらるゝ 童をよせさせられぬハいぬる身ちや二依ていらぬ事
なれ共と、様の重代の刀を此方へ進上との事なれ共逆もの事ニ小金作りにして進せふとあつて細工屋へ遣わされたれ
共俄の聲入て出来兼た 出来次第二進上といわれました 又是ハおわし百貫の折紙ちや 座敷へハ出さぬ 宿へ帰り
こなたへ進せいとおしやつたれ共最早童ハ二升二依ていり升まい 〱 イヤのふゝ是ハされ事ちや 一ツハこな
たの心を引て見よふと思ふてこそいふたれあなち夫かほしいてハ無いのふ 夫ハ兎もあれ童ハ兎角いに升 〱 イ
ヤ是ゝ夫ハそなたの氣のみしかいと云ふ物ちや おかむ程に平二戻らしめ 先ツ是もこちへおくさしませ ムリニ トル
〱 やる事ハなりませぬ 〱 先おくさしませ 扱刀も来る筈か 〱 童ハ知りませぬ 〱 扱ゝ氣のとくな事
をいふたれハいふたてこそあれ始メから何事も只は心易ふといふたに此様な物をくれられて近頃隔心ないらぬ事をさ
せられた 何と是をしんしやくせまいか 〱 其様な事はつかしうものふていわるゝ事か 腹立やゝ 〱 わこ
せ女房よゝゝ思ふ中のいさかいハ今に始メぬ事そかし よしゆるせ女房よ よしゆるせ女房と手すり中を直りツ、能
クゝ思へハ此折紙ハゝゝゝ結ふの神にておわすらん

装束 如常

用入 (ママ) かつら桶ふた 折紙

解題

《毘沙門連歌》の場合

《毘沙門連歌》は、脇狂言として又祝言に勤める曲として、単に鞍馬の毘沙門天からありの実(梨の実)の福をいただくというめでたさのみではなく、加えて連歌のおもしろさによってさらに「悪魔降状災難を打払ふ」という毘沙門天の持つ「鉾」を、また「忍辱の鎧」という宝物までもいただくという歌徳話ともなっている。

曲名を《連歌毘沙門》とする大藏流・鶯流(保教本は和泉流と同じ毘沙門連歌)の諸台本、続狂言記においても同趣向である。

毎年のこととして初寅に鞍馬の毘沙門天に連れ立つて参詣に出かけ、御前で鰐口をジャガンジャガンとならし手をたたいて拝む所までは諸本に大差はない。各流派の祖本ともいべきものが記すところは、

虎明本…是は此あたりに住居する者で御ざる、それがくらまを信じて毎月とらの日にはくらまへ参る、則今日はとらの日で御ざるほど

に、まいらふと存る、某一人にても御ざない、爰にいつも同道仕るおかたが御ざるほどに、さそふて参らふ、物申 \wedge たそ

\wedge みどもでおじやる、是へ参るも別の事でもおりない、今日寅の日で御ざるほどに、くらまへ同道いたいて参らふとぞんじて、さそひにまいつた \wedge わたくしも内々まち申たに、早々御出かたじけない、おつつけおとも申さう \wedge さらはそれがしさ

きへまいらふ、ござれ、かやうにしんじてまいるゆへに、たがひに仕合もよふてうれしゆ御ざる \wedge 仰のことく、わたく

しも左様に存る \wedge まいるほどに、程なう参りつゝた

天理本…一人出テ、くらま初トラへ、参ト云、いつもノ、同行があるト云テ、さそひニ行、よび出ス \wedge あと出ル \wedge けふハ、初ト

ラニテ、あるホドニ、くらまへ、まいらうト云 \wedge 失念シテあるニ、お出忝ト云 \wedge ソレハ、ぶ信心ナコトじやト云一扱、

同心シテまいる一道シカ、常ノゴトク、くらまに、参付テ、わきから、ワニ口ヲタ、ク \wedge あど又、おなじ事也?

保教本…罷出タルハ此辺ノ者テ御座ル某鞍馬之毘沙門天ヲ信シ毎年初寅ニ參詣致ス当年モ相替ラス參フト存ル何ト思召ケ様ニ息災テ相替
ラス參ル様ナ目出度事ハ御座ラヌ^{ツレ}仰ラル、通子孫繁昌ナ者シヤトアツテ人ミ似カリタガラル、ハ天道ニ叶タ事テ御座ル^{アト}是

ハ御前テ御座ル³

とあつて各流内容は同じである。

御前で拝んだ後は、

「扱いつものごとく年籠いたさふ よふござろ ゆるりと御ざれ 少まどろみましよ」⁴ (続狂言記)

「いつものことく是につやを申さう」⁵ (虎明本)

「さらば通夜を致しませう」⁶ (虎寛本)

「扱毎の通り通夜を致ませふ」⁷ (虎光本)

「サラバ例ノ通通夜ヲ致」⁸ (保教本)

「さらば今夜はこれに通夜を致しませう」⁹ (賢通本)

「今夜ハ、しゆく坊へ、まいらず共、ツヤヲ、せう」¹⁰ (天理本)

「今夜は宿坊へもよるまひ是につやをせう」¹¹ (和泉家古本)

「今夜ハ是に通夜を致ませう」¹² (波形本)

「よふく毎も連歌を致す時分て御さる」¹³ (和泉流秘書)

「通夜ヲセウ」¹⁴ (型付本)

「扱今夜は通夜をいたさうか但又宿坊へ參うか 嘉例でこさる程に通夜を致しますまいか 一段とようござらう 左様ならばちとまどろ

ませられ」¹⁵ (雲形本)

とあつて諸台本の殆どが「通夜」をする。和泉流は、「宿坊」へ行くか「通夜」にするか迷った上で「通夜」を選択している。これらの諸
台本の中で、「和泉流秘書」のみが「よふく毎も連歌を致す時分て御さる」と早速に「連歌」を出し、「替仕様」として「雲形本」にほ
ぼ一致する文言「扱今宵ハ是につやを致そうか但シ宿坊へ寄ませうかイヤく通夜を致たがよふ御さらう」と記している。つまり「和泉
流秘書」の〈毘沙門連歌〉の本文に該当するものを「雲形本」の「毘沙門連歌替之仕様」として次の様に記している。少し長いが全文載
せる。

名乗ヨリ、鞍馬へ參、^{ツマ}拜所迄、替事、無シ^{頭取}漸^{さうく}いつも連歌を致す時分てござる、いざ案じさせられ^{小アト}こゝろえました^頭
発句は出勝に致さう^{ホックワデガチ}ようござらう^小兩人トモ、正面向、右ノ足ヲ、前へ出ス様ニネテ、扇ヲ額ニ、アツル様ナル、心持ニ
テ、アテヌ様ニシテ、暫、案ジテ、思付、膝、直シナガラ^頭かうもござらうか^小膝直シナガラ^{ハヤデ}早出ましたか^頭毘沙門

の 毘沙門の 福ありのみと聞からに 一段と出来ました、脇を致さう ようござらう か 何とでござる 鞍馬ぎれより百足くひけり 扱く面白事でござる、先吟してみませう かうもいはれませう
 頭 扱く 夫ハ有がたう存ます 有がたう存ます 先お通なされて下され 左様でござります 金銀を持たか 是は多門天の仰共覺
 門、真中ニ、腰掛 扱汝等は、年月歩をはこぶが、何とたのしうなりたいか 左様でござります 是は多門天の仰共覺
 には、ちともたいでかなはぬ物が有が、そち達は持たか 扱それは何でござります 左様でござります 是は多門天の仰共覺
 ませぬ、金銀を持ますれば、お願申は致ませぬ 扱すれば米も麦も有まいなあ 左様でござります 是は多門天の仰共覺
 人ともに、富貴に成様に宝を与うぞ 扱それは有がたう存ます 有がたう存ます 正面向ナガラ、銚、カヒコミ、右ヘヒ
 ラキ、左ノ手ヲ、ウケテ、前ヘサシ出シ、イロ詞いでくありの実わらむとて、らむばの銚をふりあげて、すつかり、是を汝にやるぞ
 有がたう存ます 汝にもやるぞ 有がたう存ます 扱そち達が今吟じたは何事ぢや 頭 ハア、お耳に入ます様
 事ではござりませぬ いやく、おもしろさうな事で有た、是非ともいへ 左様ならば申上ませう、兩人連歌を致てござる
 シテ 何連歌をした 左様でござる 扱それは奇特な事ぢやノリテ云ベシ 扱其連歌はいかに 毘沙門の、ふくあり
 のみときくからに 鞍馬ぎれより、むかでくひけり 上 毘沙門連歌のおもしろさに 舞働 右迄ノ、作法、同様、但、
 アリノ実、請取所、ス、ミ出、片膝付、扇ヲ、左へ、カリソメニ持、右ノ手ニテ、ツカミ、取、イタゞキ、懷中、スルモ、ヨク、ア
 ルベシ、是ヨリ、跡、替事、ナシ
 一 装束、三人トモ、替事、無シ
 一 脇狂言ニテモ、其時ノ、模様ニヨリ、又ハ時刻ニヨリ、右ノ勤方モ、ヨク、アルベキカ、又、祝言ニ、勤ル時ハ、決テ、此勤方、
 シカルベシ
 一 モシ、此狂言、能ノ番ニ、アラズ、狂言斗、囃子方、会釈、ナシニ、勤ル時ハ、一セイニテ、出ル所、連歌ヲ、二人シテ、吟ジ、
 笑タラバ、幕、アゲサセ、出ルベシ、尤、舞働、ナシ 16
 そもそも狂言《毘沙門連歌》において「連歌」の位置はどのようであつたか。諸本は
 「やることはなりませぬ どふでもとらねばならぬ 其義なら、もう一度多門天の御まへ、戻て、御前で連歌をして、其句がらによつ
 て、どれへなりととらふと思ふが、何とあらふ」17 (続狂言記)
 「某がいふやうにめされたらはやらふ 扱それは何とした事ぞ 扱やる所でもなひほどに、いひずてをして、それにそなたの
 おつきやつたらばやらふ 扱それこそやすひ事なれ、随分つけてみませう」18 (虎明本)

「是非共配分被成て被下い（一のアド）其儀成らば連歌を致いて、其上でいか様共致しませう」¹⁹（虎寛本）

「こちへもわけて被下い 夫ならバ連歌を致て勝た方へ御福を取ふでハ御座らぬか」²⁰（虎光本）

「昔ヨリ哥連歌ニハ仏神モ御納受有ト申程ニ某カ発句ヲ致サフ程ニソレニヨフ付サセラレタラハ渡シマセウ」²¹（保教本）

「この下された梨について当座を致いて、どちらとも句柄の出来た者が主にならうと存ずるが、これは何とござらうぞ」²²（賢通本）

「たがいニロンズル さあらば、ソレガシ、れんがをせう」²³（天理本）

「タガイニロンズル さあらば此上は連歌をせう」²⁴（和泉家古本）

「さふあらハ此上ハ連歌をして則某カ発句をせう程に脇をさしませ脇が出たらハ兩人のにせう左なくハ某一人のに致さう」²⁵（波形本）

「此上ハ勝負にせうト云 何をせうト云 互に連歌をして負たらハ進せう又勝たらハ某のしや」²⁶（型付本）

「勝負には何をしませう 好の道でござる程に、連歌を致して、それがしが発句を致さう程に、脇をめされたらハ兩人のに致さう
ず、さなくはそれがし吾人のに致さう」²⁷（雲形本）

諸本のすべては決着をつけるための連歌であつた。ただ一本『和泉流秘書』を除いて。もともと狂言（毘沙門連歌（連歌毘沙門））は、福として授けられた一個の梨子（無しを避けて有りの実という）を二人のうちのどちらのものにするか勝負のための連歌であつたはずである。が『和泉流秘書』は、連歌の発句脇句の「毘沙門のふくありのみと聞くからに鞍馬ざれより百足喰けり」を二人で吟じて満足して笑っている所へ、異香薫じて只ならぬ様子になり、福神の毘沙門天が兩人の前に來臨して「兩人共に福貴してとらせうぞ」「出てくありのみ割ん迎らんはのほこをふり上ケてすつかり是を汝へやるぞ」と一ノアドが貰つたものは「銚」で、二ノアドの「我にもふくをあたまへ」と欲しがつた所「にんにくの鎧」をぬぎ与え皆満足して納まるという趣向にして、連歌を前面に押し出したために「ありの実」を福としていただいた事象は消えてしまい、連歌の語の中に埋没してしまっている。

《毘沙門連歌》を山脇和泉家の流儀のやり方と少し變えて演じようと試みた狂言師がいた。それは連歌によつて福神を呼び込む福神狂言の様式と一致し、橋本朝生氏が「恐らく後世試みに改作したもの」²⁸と言いついてゐるのであるが、それが可能なのは弟子家ではなく山脇和泉家の者であろうと思われが、それは和泉元業より以前の者であつたであろう。元業は「雲形本」に集大成する際になんぞ増補をしているが、《毘沙門連歌》を筆録する時点において代々の狂言台本は承知してゐるので、本来の仕様の形をとつたが、「和泉流秘書」の演出も無視できず「替之仕様」として書き記し、最後の一ツ書に記すように能の番いではなく「祝言」として勤る時にこの仕様を指定したものであらう。「和泉流秘書」の立場から言えば、別仕様を試みたけれども、本来の演じ方は無論無視できず「替仕様」として書き置いたということにならうか。

注

- 1 『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇上』表現社 31頁
- 2 『天理図書館善本叢書狂言六義上』八木書店 101頁
- 3 『天理図書館善本叢書驚流狂言伝書保教本一』八木書店 233頁
- 4 『続狂言記の研究』勉誠社 197頁
- 5 1に同じ 31頁
- 6 『能狂言上』岩波文庫 143頁
- 7 『大蔵虎光本狂言集二』古典文庫 227頁
- 8 3に同じ 234頁
- 9 『日本古典全書 狂言集上』朝日新聞社 68頁
- 10 2に同じ 102頁
- 11 『日本庶民文化史料集成 第四卷 狂言』三一書房 10頁
- 12 『波形本九』十壹 狂言共同社蔵
- 13 『和泉流秘書三』愛知県立大学附属図書館蔵本 翻刻 7頁
- 14 書写年代不明 仮称『型付本』家元所有であったが現在狂言共同社蔵 『狂言』第八五号(昭和四一年一月)に佐藤友彦氏による紹介がある。
- 15 『雲形本二』狂言共同社蔵
- 16 15に同じ
- 17 4に同じ 198頁
- 18 1に同じ 32頁
- 19 6に同じ 143頁
- 20 7に同じ 228頁
- 21 3に同じ 238頁
- 22 9に同じ 69頁
- 23 11に同じ 10頁
- 24 12に同じ
- 25 14に同じ
- 26 15に同じ
- 27 『狂言の形成と展開』 151頁
- 28